

【研究ノート】

ケベックでの第3政党の台頭 La montée des tiers partis politiques au Québec

陶山宣明
SUYAMA Nobuaki

Résumé

Le Québec maintient le scrutin majoritaire à un tour pour élire les députés de l'Assemblée législative (l'Assemblée nationale) depuis la confédération en 1867. Un tel système électoral a tendance à engendrer le bipartisme, où deux grands partis politiques dominent l'arène. Jadis, ces deux partis étaient les Libéraux et les Conservateurs, jusqu'à ce que les derniers soient remplacés par l'Union nationale. Puis le Parti québécois (PQ), indépendantiste, a finalement trouvé sa propre place à la gauche des Libéraux au spectre idéologique. L'apparition de tiers partis politiques puissants est caractéristique de la politique québécoise dès le début des années 70. Ce sont le Ralliement créditiste du Québec (RCQ) sur la scène provinciale en 1970, l'Action démocratique du Québec (ADQ) en 1994, Québec solidaire (QS) en 2006, et la Coalition Avenir Québec (CAQ) en 2011. Option nationale(ON) actuellement cherche son premier siège. Ces partis-ci se positionnent à la fois à la gauche et à la droite de l'échiquier politique. Sous un autre angle, l'indépendance forme un axe important pour distinguer les partis politiques au Québec. Le PQ s'oriente moins vers la souveraineté qu'autrefois tandis que cette option est aujourd'hui prônée plus fort par ON et QS.

キーワード：第1野党、第3政党、単純小選挙区、2大政党制

Mots-clés : Opposition Loyale, tiers parti, scrutin majoritaire à un tour, bipartisme

はじめに

ケベック州議会選挙では、イギリスの伝統に倣い、単純小選挙区制が使用されていて、各選挙区で最も多くの票を獲得した候補者が議員に選出される。他の全ての選挙制度と同様に、単純小選挙区制には利点と不利な点が認められる。第1政党は得票率を大きく上回る議席率となり、過半数の票を得られなくても単独で過半数議席を得易く、政権が安定する利点がある。不利な点として、その正反対で、地理的に支持が散らばっている小政党にとっては、1つたりとも選挙区を奪うのは至難の業である。又、多数決の原則に基づく政体で、過半数の票を得ていない候補者が当選し、全体では州民の過半数の支持を受けていない政党が政権の座に就くことの矛盾も指摘される。

フランスの社会学者モーリス・デュヴェルジェ (Maurice Duverger) の法則に従って¹、ケベックでは、カナダ連邦が成立したコンフェデレーション (1867年) 以来、概ね2大政党制が根付いていた。19世紀後半には、連邦レベルと同じく、自由党と保守党がケベック議会で議長の右と左で相対する議会が長く続いた²。19世紀の末から1930年代まで自由党の1党優位の時代が続いたが、この時期に第3政党として辛うじて目立った存在は労働党とリーグ・ナショナリストである。前者は1890年設立で、モンレアルとケベック市の工場地域の労働者階級が多い選挙区でニッチを築いた。後者はナショナリスト政党で、アンリ・ブーラサ (Henri Bourassa) が1903年に同志オリバル・アスラン (Olivar Asselin) と立ち上げた。

アクション・リベラル・ナショナル (Action Libéral Nationale) は自由党の不満分子が離脱して立ち上げた政党で³、大恐慌の時の1935年選挙で多数の議席を獲得した背景には選挙戦術で保守党の全面的な協力を得たからである。保守党党首モーリス・デュプレシ (Maurice Duplessis) は、ALNを保守党に統合して新党ユニオン・ナショナル (UN) を立ち上げた⁴。UNは連邦保守党と袂を分かち、州独自の政党が初めてケベックの2大政党の1つとなった。1936年選挙に圧勝し、デュプレシは、その次の選挙で自由党に大敗して政権を1期だけ明け渡したが、1959年に没するまで何と19年も州首相の地位を守った。この時代に州議会で1つでも議席を得られた第3党は、ブロック・ポピュレールと社会民主党である。前者は戦時の徴兵制に絶対的に反対するケベックに興った政党で、州レベルではアンドレ・ローランドー (André Laurendeau) を党首に仰いだ⁵。後者はカナダ全体の協同連邦党 (CCF) のケベック組織で、もし勢力を伸張していれば、ケベックの政党制に大きな

変化をもたらしていた。

表1 ケベック州議会の選挙で2大政党が占めるシェア

	得票率	議席率
1867～1966	99.85	97.35
1970～2014	79.39	90.52

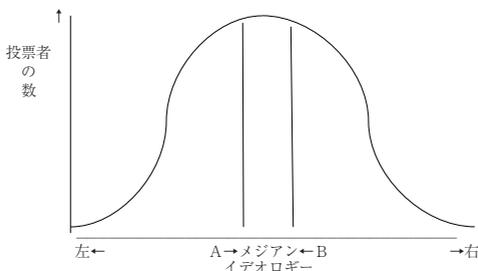
(注) 著者作成。1966年の次の選挙は1970年に行われた。

表1が示すように、静かな革命が起こった1960年代まで、2大政党の選挙での平均得票率は90%を上回り、議席率では寡占状態にあった。ルネ・レヴェック（René Lévesque）によって結成されたケベック党（PQ）が州議会選挙に参戦してからは、2大政党の得票率は80%を下回るようになり、議席率では辛うじて90%台に乗っているだけである。逆に言うと、1970年代以降、平均して1割近い議席数を第3政党が奪っていることになる⁶。今世紀になってから行われた選挙に限定すると、15.84%にまで第3政党の議席率は高まっている。この現象を、政党制度の一般モデルから分析したい。

1. 政党の立ち位置の理論的な考察

1 党独裁制の国では、競争相手がないため、たった1つだけの政党が真右に寄ろうと真左に寄ろうと、票を失う心配をしなくていい。党の中核部は好きなように舵取りが出来て、選挙は形式に過ぎない。ところが、ケベックに代表されるような単純小選挙区制に育った2大政党制となると、それぞれの政党は社会の理想像に色付けられた党是を掲げて、その目標を実現する目的で票を奪い合うが、現実には選挙に勝って政権を奪うために、競争相手よりも1つでも多くの議席、望むらくは過半数議席を取りたい。

図1 2政党間の競争モデル



(注) Flanagan (2014), p.51.

図1で示すと、選挙民は一面的なイデオロギー軸で左右になだらかなベルカーブを作っていると仮定しよう。政党Aと政党Bが共に合理的な動きをすれば、両党とも中央線になるだけ近づいて行き、メジアンを境に向かい合う形になる。なぜなら、政党Aにとっての左側、政党Bにとっての右側の票は対抗勢力に奪われる心配がなく、しかも、両党の狭間に位置する票は数的に多いので絶好の草刈場となるのである。従って、2大政党制の政党の立ち位置の解は、それぞれ中道左派と中道右派となる。様々な理由で対峙する政党が衰退、瓦解している場合には、擬似的な1党優位体制が出来上がり、その政党は比較的自由に軸の移動を許される。例えば、本来が右寄りの党ならば、右に強引に少々動いても選挙民からバッシングを受けて政権転落とはなりにくい。

2大政党制が確立しているところに第3党が参入する場合、その新参政党の立ち位置は、政党Bの右側か、政党Aの左側か、政党Aと政党Bの中間の3つに1つとなる。比例代表制や中選挙区で1つの選挙区から複数の議員を選び出す選挙制度ならば中道を目指す政党が新しく生まれて成功する素地はあるが、小選挙区制の場合には、ケベック州議会やカナダ下院で馴染みの単純小選挙区制であろうと、オーストラリア下院選挙で使用されているような優先順位付連記投票であろうと⁷、2大政党の中間に入って行くのは容易なことではない。俄かに起こった新政党は、組織力、財力、人的資源で劣っているため、既存の大政党に太刀打ちするのはほぼ不可能だからである。従って、既存政党の右側か左側に位置する第3党の方が成功を取め易い。

現在、イギリス独立党(UKIP)は、保守党を右側から脅かす存在である。そのように政党Bの右に位置する新政党は、単純なモデルでは、立ち位置の右側を全て政党Bから奪えることになる。そこで、政党Bはどうするか。最も普通に考えられる手は、右側に少し寄って右側の新党に打撃を与えることである。そうすると、政党Aは漁夫の利を得られる。のみならず、右側の票の奪い合いは、新党が既存政党に取って代わる結果にもつながる可能性がある。また、右寄り政党の小競り合いを横目にして、政党Aは、中央に居座るか、本来の党是に立ち戻るべく左方向に移動して行く可能性もある。その場合、政党Bとの間に政治的なスペースが生まれ、単純小選挙区制の定番である2大政党制に変更が及んで、政権を実質的に争う政党の数は普通に2.5か3になり得る。3大政党制は3つの政党の内どれもが政権に就ける

だけの力を持つ三竦み状態なのに対して、2.5 大政党制では 3 つの政党は 2 強 1 弱と形容される。左側からの新党の勃興についても、左右対称で同様のシナリオが成立する。

2. 左側に興ったケベックの第 3 政党

ケベック州議会で「静かな革命」後に増えた第 3 政党の生まれた背景、在り方、作戦、結末などを見て行きたい。自由党政権で閣僚まで務めたレヴェックは、ケベックの将来のビジョンを巡って党のマジョリティと意見の対立が生じたため 1967 年に離党し、ケベック独立を標榜する主権・連合運動 (MSA) を興した後に、同じく独立を目指す右翼のナショナル集合 (RN)、左翼の国民独立連合 (RIN) も取り込んで、1968 年に PQ を船出させた。1970 年選挙でいきなり 23.06 % の票を獲得し、7 議席を得た。但し、党首は議席を失ったため、議会内の党リーダーはカミーユ・ローラン (Camille Laurin) が務めた。この時点で、勢いも考慮すれば、2 大政党制でケベック自由党 (PLQ) と対峙する政党は既に UN から PQ に移っていた⁸。実際、1973 年には、議席数を 1 つ減らしたものの、得票率は 30.22 % にまで増やしている。そして、1976 年には、議席を爆発的に伸ばし (6 → 71)、政権の座に就き、レヴェック自身も議席を得て、州首相に就任した⁹。

PLQ は、元々はカナダ全体の自由党の一部として中道左派政党で、保守党や UN とメジアンを隔てて睨み合っていた。ところが、PQ は社会民主主義的な政党で、PLQ の左側に位置を取ったため、PLQ は作戦を講じないと左側の票を多く奪われることは容易に予想がついた。1960 年代に静かな革命の推進役を務めた PLQ は、強い州政府を代弁し、ケベック電力の州営化もしている¹⁰。ルサージュ PLQ は政権に 2 期あった後に、それを UN に明け渡したが、この UN 政権は、ダニエル・ジョンソン首相が在職中に急死するなどして人材不足に泣き、1 期のみで終わった。そもそも 1966 年の政権交代劇にしても、PLQ の方が UN よりも得票率は高かったのに、UN は農村部を票田にするため、結果として多く議席が取れたからである。ケベックにも 1 票の格差が都市部と農村部の間に存在し、後者で 1 票の重みが増す。デュプレシによって興された UN は既に衰退期を迎えていたので、新党首ロベール・ブーラサ (Robert Bourassa) が率いる PLQ は、恐れることなく小さな国家を目指す自由主義的な方向に舵取りできたのである¹¹。この時期を境にして、PLQ は中道右派で、PQ が中道左派政党になっている。PLQ は連邦自由

党（PLC）と関係が切れていたため、この方向転換に対して党内の反発も少なかった。

2006年に作られたケベック連帯（QS）は、ケベックの独立を目指す左翼政党で、3度にわたって政権に就いて第1野党として常に政権の座を窺うPQよりずっと左側に位置する。2007年選挙で123の選挙区で候補を立てていながら1議席も取れずに終わったが、次の選挙で初当選者を出し、今では2人の共同ポルトパロールを含む3議員が活躍している。QSは徐々に支持者を増やしているが、再建期にあるPQはポーリーヌ・マロワ（Pauline Marois）の後、未だ、確定的な新党首も選べていない状態にあるため、QSが左側から攻めて来ることにどう対応するかは、これからの注目である。

3. 右側に興ったケベックの第3政党

ケベック信用集合（RCQ）は1962年に連邦レベルで勢力伸張しているが¹²、州レベルにおいても1970年選挙で躍進している。連邦選挙に集中して州選挙には誰も出馬させない方針が覆って、1970年選挙に初挑戦したところ、RCQは一挙に12議席を奪った。だが、ケベックの右側の老舗政党UNが衰退期に入ったことの空間にうまく入り込めた感が強い。従って、その次の選挙で、農村部に強いPQと中道右派に転じたPLQに押されて、たったの2議席に止まり、内紛も相俟って、急速に衰退の道を辿り、1978年には解体した。

ケベック民主行動（ADQ）の起源は、1994年にまで遡る。PQ出現後に、本来は中央線の左側のPLQが右側に移った後にも、UNが解党したため右側にはなお大きな政治的な空間が残っていた。ADQの創始者はジャン・アレル（Jean Allaire）だが、健康上の理由でマリオ・デュモン（Mario Dumont）に党首の地位を譲った。2人ともADQを立ち上げる前にはPLQに活躍の場を求めていたが、連邦政府との関係で生温いPLQに失望し、だからと言って政治的な傾向からしてPQにも加われずに、右側に寄った政党結成となった。

デュモン党首は、1994年選挙からリヴィエール・デュルーの選挙区で5期連続当選したが、2008年の選挙で党が大きく後退したため、引責辞任した。たった1年前の2007年3月選挙でADQは41議席も取り、PQを3位に蹴落として第1野党に躍り出ている。ジャン・シャレー PLQ政権は多数派政府から少数派政府に格下げされ、議会運営に支障が出て立法が難しくな

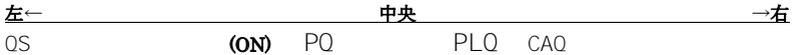
った¹³。三棘みの選挙戦で辛うじて勝利した PLQ は、ADQ の躍進を右側からの脅威と一時的にはみなしたにしても、選挙が終わって数か月で ADQ の支持率はジリ貧となり、次の選挙は PLQ 対 PQ の本来の図式に逆戻りすることは明らかであった。世論調査で勝てると踏んだシャレー首相は、2008 年 11 月に議会を解散して勝負に出た。PLQ は新党首マロワを担いだ PQ に完勝し、ADQ の右からの挑戦もかわした。

PQ 政権で閣僚の経験があるフランソワ・ルゴー (François Legault) が、ビジネスマンのシャルル・シロワ (Charles Sirois) と共に、2011 年に、新しい中道右派政党、ケベック未来連合 (CAQ) を立ち上げた。CAQ は ADQ よりも中央よりだが、PLQ よりは右に位置する政党で、2012 年に 19 議席、2014 年に 22 議席を取っている。2012 年に CAQ が参戦していなかったら、シャレー首相はもう 1 回選挙に勝っていたと予想できる。再建期にある PQ が新しいリーダーの下でどう出るかに依るが、PLQ は CAQ の票を奪うために右側に寄って行く可能性がある。海の物とも山の物ともつかない未知の政党よりも、既存政党、それも政権与党が満足な仕事をしている限り、プログラムが類似していれば、通常は後者に軍配が上がる。一方で、PQ がこのまま衰退して行くなれば、PLQ が中央に悠々と腰を下ろして長期政権を築き、はたまた、場合に依っては、1960 年代までの立ち位置、つまり、中央線を跨いで中道左派の政党に戻る可能性も皆無ではない。

おわりに

政治離れ、それも特に若者の政治への無関心の現象が、カナダを含め、多くの民主主義国で議論されている¹⁴。しかし、同じカナダの州でも、例えばアルバータなどは度々 50 % を切るのが現状であるのに対して、ケベックの選挙の投票率はほぼいつも高く、70 % を割ることは稀である。最近の大学の授業料を巡る政治活動に見られたように、ケベックの若者の政治への関心は他州に優っている。従って、ケベック政治を論じる時には、棄権する投票者が投票したら違った結果が出るのではないかと言った議論は、これからもさほど意味がない。

図 2 ケベックの政党の直線モデル

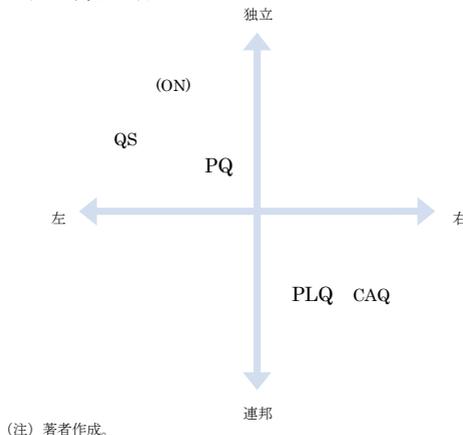


(注) 著者作成。

現在の議会で議席を持つケベックの政党を左から右に並べて見ると、図2 のようになる。もう1つ議会政治への参加の機会を窺っている政党がオプション・ナショナル（ON）で、中道左派だが、PQ より少し左側に位置する。PQ が政権を掌握して中央に寄って行く過程で、その動きに反発して生じた政党が QS とするならば、ON は PQ がケベック独立の目標から焦点をずらしていることに業を煮やしたジャン＝マルタン・オーサン（Jean-Martin Aussant）によって2011年に立ち上げられた。ON を始めた時には、オーサンは州議会で議席を持っていたが、2012年の選挙で議席を失った。現党首はソル・ザネッティ（Sol Zanetti）であるが、小選挙区制では当選する見込みは薄い。

ケベックの場合には、右派と左派の平行軸に加えて、ケベックの独立を望むか、或いは、ケベックの独自性を認められてカナダ連邦の中に留まることを望むか、もう1つの軸が認められる。ON は言わずもがな独立派だが、社会政策、自然環境保護、人権擁護などが主要関心であると思える QS もケベックの主権に参同している。正しく、ケベックで1970年代から第3政党の比率が高まったのは、ケベックの独立が政党の立ち位置を決める垂直軸として出現したからである。図3は、独立と連邦残留のどちらを希求するかを垂直軸にして、ケベックの政党を整理し直している。

図3 ケベックの政党の4象限モデル



当然のことながら、ADQは小選挙区制を比例代表制に改めるよう訴えて

いたし、QS は今でも小党として党運に大きな影響を及ぼす選挙制度に変更を求めている。比例代表制が採用されると、2014 年選挙の得票率で、QS は 10 近くの議席獲得が目論めていた。今後、2 大政党のどちらもが過半数議席を取れない状況が生まれると、小政党が政策形成に関与できる可能性が広がって来る。

(すやま のぶあき 帝京平成大学)

注

- 1 各選挙区の議席の数が 1 つだけだと、その 1 議席を巡って有力な政党の数は 2 つにまで絞り込まれる。複数の N 議席を基本とする中選挙区になれば、重要な政党の数は $N + 1$ となるのが法則である。Duverger(1951)参照。
- 2 1887 年から 1891 年まで州首相を務めたオノレ・メルシエ (Honoré Mercier) の所属は一時期ナショナル党だったが、元々は自由党党首である。当時は政党の制度化がさほど進んでおらず、首相の所属はナショナル党で閣僚のほとんどは自由党といったことも可能だった。1885 年に、ルイ・リエル (Louis Riel) がジョン・A・マクドナルド (John A. Macdonald) 保守党連邦政府によって謀反の罪で処刑されたことに反対する保守党内の議員を呼び寄せて、メルシエは新党を結成したのである。
- 3 設立者のポール・グアン (Paul Gouin) は、メルシエの孫であり、1905 年から 1920 年まで 15 年間も州首相の座にあった自由党ロメール・グアン (Lomer Gouin) の息子だった。
- 4 Quinn (1979) が詳しい。
- 5 多方面で名が残る人物で、1960 年代に設けられた 2 言語 2 文化委員会の長を務め、カナダ全体のバイリンガル政策に貢献している。
- 6 PQ は 1970 年に得票率で自由党に次いで 2 位になったが、議席数では古参の UN との社会信用党の後塵を拝して未だ 4 位に過ぎなかった。表 1 の数値は、その時から既に 2 大政党の地位を UN から奪い取り、今日まで PLQ と PQ が 2 大政党を形成しているとみなして算出されている。従って、1970 年選挙で UN を 2 大政党の 1 つとするなら、2 大政党の得票率は表 1 よりも少し下がり、議席率では少し上がる。又、PQ は 2007 年には第 3 党に落ちているが、第 1 野党となったケベック民主行動 (ADQ) の数値を代替すると、2 大政党の得票率、議席率は微かながら上昇する。
- 7 オーストラリアの 2 大政党、労働党と保守連合の間を縫うようにして中道を

行く民主党が立ち上げられたが、比例代表制を採る上院議員選では国会議員を出せたけれども、下院では遂に1議席も取れずに終わっている。陶山（2014）、p.88 参照。

- 8 この頃には、PLQは連邦自由党（PLC）から完全に独立した政党となっている。1955年、ケベック州出身のルイ・サンローラン（Louis St. Laurent）が連邦首相だった時に、決別の発端となる事件が起こった。デュプレシは州首相だった頃、自由党の州部はオタワの自由党と不当に結託していることの非を訴えて、自党が自由党に対して有利になるようにした。現実には、ジョルジュ＝エミル・ラパルム（Georges-Emile Lapalme）自由党ケベック部リーダーがデュプレシ州首相と州税の問題でもめた時、サンローラン首相は、同じ政党のラパルムの支持に回らず、デュプレシ側に付いた。自由党ケベック部はPLCとくっついていることは、マイナスになっても、結局何のプラスにもならないと判断したのである。1964年、レスター・ピアソン（Lester Pearson）連邦首相とジャン・ルサーージュ（Jean Lesage）州首相の時に、正式な分離が起こっている。
- 9 詳細は、Fraser（1984）。
- 10 後にPQリーダーとして左傾化するレヴェックが、天然資源相として、この州営化に踏み切った。
- 11 Parisella（2012）参照。
- 12 Pinard（1971）参照。
- 13 ケベック州の少数派内閣は珍しくて、その前は19世紀にまで遡る。
- 14 Delacourt（2013）参照。

参考文献

- Delacourt, Susan (2013) *Shopping for Votes: How Politicians Choose Us and We Choose Them*, Madeira Park, BC: Douglas & McIntyre.
- Duverger, Maurice (1951) *Les partis politiques*, Paris: Armand Colin.
- Flanagan, Tom (2014) *Winning Power: Canadian Campaigning in the Twenty-First Century*, Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.
- Fraser, Graham (1984) *PQ: René Lévesque and Parti Québécois in Power*, Montreal and Kingston: McGill-Queen's University Press.
- Parisella, John (2012) "Robert Bourassa: Vision and Resilience", *Options politiques*, vol.33, numéro 6, juin-juillet, pp.54-58.
- Pinard, Maurice (1971) *The Rise of a Third Party: A Study in Crisis Politics*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Quinn, Herbert F. (1979) *The Union Nationale: Quebec Nationalism from Duplessis to*

Lévesque, Toronto: University of Toronto Press.

陶山宣明（2014）「2013年オーストラリア連邦選挙の分析」『帝京平成大学紀要』
25号、87-95頁。